

氏 名：飯 村 直 子

学 位 の 種 類：博士（看護学）

学 位 記 番 号：甲 第 3 0 号

学位授与年月日：平成 2 0 年 3 月 1 8 日

学位授与の要件：学位規則第 4 条第 1 項該当

論 文 題 目：小児科外来における看護師の働き

ーある地域密着型中規模病院におけるエスノグラフィーー

NURSING CARE FOR CHILDREN AND THEIR
FAMILIES IN THE PEDIATRIC OUTPATIENT CLINIC :
ETHNOGRAPHY OF THE COMMUNITY HOSPITAL

論文審査委員：主査 筒 井 真優美

副査 武 井 麻 子

副査 守 田 美奈子

副査 平 澤 美恵子

副査 鶴 田 恵 子

論 文 内 容 の 要 旨

近年、少子化核家族化が進み、小児科外来には様々な発達段階の子どもと家族の多岐にわたるニーズがあり、外来における看護ケアは非常に重要であると考えられる。しかし、小児の外来に関する研究は、先天性疾患や慢性疾患で継続的なケアを必要とする子どもを対象とする専門外来や特殊外来に関するものがほとんどであり、小児科一般外来に焦点を当てた研究は少なく、外来での看護の実態はほとんど明らかにされていない。

【研究目的】 地域密着型中規模病院の小児科外来において看護師がどのような働きをしているのかを明らかにする。

【研究方法】 本研究では、研究者自身が実際に地域密着型中規模病院の小児科外来に赴き、そこで展開される診療や看護の現場の出来事を見、聞き、肌で感じたことを詳細に記録するエスノグラフィーを研究方法として採用した。フィールドは東京近郊のベッドタウンにある、総病床数約 300 床、22 診療科を有する一般病院の外来部門の小児科一般外来であった。研究参加者は、小児科外来の 11 名（常勤 8 名）の看護師を中心として、子どもと家族、他の医療職者など、小児科外来に交流するすべての人々であった。研究期間は 1 年 6 ヶ月であった。

分析はデータ収集と平行して進め、データの解釈や分析については指導教員および小児看護の専門家グループからのスーパーヴィジョンを受けた。また、必要に応じて、データの解釈について研究参加者に確認した。

【倫理的配慮】 研究の主旨を、看護師、医師、他の医療職者には文書を用いて口頭で説明し、研究参加の承諾を得た。保護者には文書と口頭で、子どもには発達段階に合わせた言葉や方法を用いて説明を行い、研究参加の承諾を得た。その際、研究への参加は自由であること、拒否や途中

辞退が可能であること、そうすることによる不利益は一切生じないことを予め伝えた。参加観察やインタビューは業務に影響の出ない範囲で行った。得られた情報はすべて匿名扱いとし、本研究以外には使用しないことを保証し、希望者には研究結果を配付することを伝えた。また、研究計画書は、日本赤十字看護大学研究倫理審査委員会の審査を受け承認された。

【結果】

地域密着型中規模病院の小児科一般外来において、次のような働きを行っていることが明らかになった。また、こうした働きをスムーズに展開するために、小児科外来の看護師は看護師同士、あるいは他の専門職者と連携をしたり、技の伝承を行ったりしていた。

1) 子どもだけでなく家族も見る：様々な健康レベルと発達段階の子どもが家族に付き添われて訪れる、地域密着型中規模病院の小児科一般外来は日々何が起こるかわからない、先の展開を読むことが難しい緊張した場であり、看護師は、何か異常なことはないか、緊急に判断しなければならないことはないかと「アンテナを張って」いた。その際に、自らの状態を十分に語ることができない子どもに代わって家族から情報を得たり、また、家族の顔色や表情、態度、身だしなみなどから家族の気分や体調を把握したりすることが重要であった。時には子どもの様子と家族の言動が一致しないなど、両者を照らし合わせて、子どもの現状を把握する必要があった。

2) 医師と家族とをつなぎ補足する：看護師は、診察室での医師との会話の内容や態度から、医師の説明を家族が理解しているかを判断し、診察後の子どもと家族に医師の説明を補足したり、帰宅してからの看護の要点を伝えたりしていた。そのために作成されたパンフレット等もあり、看護師は常にタイミングを計り、家族の個別性を尊重して関わっていた。

3) 子どもをケアする家族の力を支える：小児科一般外来では、子どもが発熱したときに基本的な対応ができず、医療者にすべてをゆだねようという姿勢で来院する「育児力の乏しい親」がいた。看護師はこうした家族に戸惑いながらも、家庭での子どもの看護について伝えたり、育児について相談に乗ったりしていた。また、病気の子どもの看護する家族の身体的、精神的負担を思いやり、労るように接していた。

4) 子どもと家族との間を調整する：検査や処置の際に、看護師は子どもと家族に説明し、また、両者の間を調整する働きをしていた。また、家族が子どものニーズを的確に捉えていないと感じた場面では、その場限りの対応ではなく、常に成長発達する子どもの未来を見据えた視点で関わり、またそのような視点を家族にも示していた。

5) 虐待などの兆候を捉える：育児の仕方がわからない、あるいは子どもの反応を読み取れず、虐待をしかねない「見過ごしてはいけない」ニーズを持った家族がいた。看護師は問診や体重測定の際に、子どもの身体を観察し、虐待の兆候はないか確認していた。また、特別に支援を必要としている家族については院内の多職種と連携し、フォローしていた。

【考察】

1) 「アンテナを張る」小児科外来看護師：地域密着型中規模病院の小児科一般外来で、看護師は「アンテナを張って」おり、そこには小児科一般外来の複雑性が関与していた。それは、子どもの健康レベルや発達段階の多様性および家族も援助対象であるということ、また、日々何が起こるかわからない、先の展開を読むことが難しい予測の不確実性、さらに外来の関わりは基本的に過去も未来もない、現在だけの1回限りの関わりであるということであった。看護師は常に「アンテナを張って」気になる子どもと家族を見つけ、どのような援助を必要としているのかを判断し、さらに、援助の機会はこの場限りかもしれないことをふまえて、そのとき、その対象に合っ

た個別のアプローチに素早くつなげようとしていた。2) 小児科外来で家族と関わる難しさ：家族の中には、「常識の通じない今どきの親」や「育児力の乏しい親」などがいた。このような親は「トラブル」を起こしやすい要素を持った家族であったが、一方で育児の仕方がわからない、あるいは子どもの反応を読み取れず、虐待をしかねない「見過ごしてはいけない」ニーズを持った家族でもあった。看護師達は、このような家族に、「トラブル」にならないように細心の注意をしながら関わっていたが、それは、外来受診の主導権は常に家族にあるので、外来との関係が切れてしまって、子どもに不利益な状況が起こらないようにという配慮が必要であったからである。3) 小児科外来のチームワーク：フィールドとなった小児科外来では看護師同士、また看護師が他のスタッフと協力し、声を掛け合って、診療が展開されており、チームとして子どもと家族の援助について考えていた。また、看護師は、この地域で生活する生活者として、生活体験を生かし、さらに専門職として得た知識や技術を持って、他のスタッフと協力して、子どもと家族を捉え、援助していた。この小児科外来のチームワークには、小児科外来のシステムが受付から診療、会計までを一つの空間で完結するようになっていたことも影響していたと考えられる。

論文審査の結果の要旨

本研究は、在院日数の短縮化などで近年注目されて来たが、研究としてこれまであまり描かれることのなかった、小児科一般外来の複雑な看護に焦点を当て、その働きを記述しようとしたことに意義がある。

少子化、核家族化が進行する現代社会の中で、地域密着型中規模病院の小児科一般外来で日々繰り返されている混沌とした状況が、結果の中に生き生きと描かれていたことは評価できる。特に様々なニーズを抱えて来院する、様々な健康レベル、発達段階の子どもと家族の姿、また、そこに関わる看護師が子どもの病状を読み取り、優先順位を判断し、援助している様子、また、対応の難しい家族に対して、緊張感を抱えながら関わっている様子など、外来ならではの複雑な看護師の働きが、観察場面やインタビューをとおして十分に描かれていたことは評価できる。

考察は結果から導きだされた看護師の働きが「A.『アンテナを張る』小児科外来看護師」、「B. 小児科外来で家族と関わる難しさ」、「C. 小児科外来のチームワーク」の3点から意味づけ、考察されており、本研究の独自性が強調された。

「A.『アンテナを張る』小児科外来看護師」は本論文のオリジナリティーが強調される箇所である。その中の「1. 小児科外来の複雑性」では他の一般外来と異なる小児科特有の複雑性が描かれ、「2.『診療の補助』という看護の専門性」では小児科外来特有の看護の専門性が見出された。病棟のように療養する患者を看護するわけではない外来看護師の役割は主に「診療の補助」と考えられ、看護としての独自の働きがみえにくいと言われている。しかし、少子化が進み、周囲に相談する人が少ない家族への看護師の関わり方は、単なる「診療の補助」以上の意味があった。看護師は子どもの最善の利益を守るために「アンテナを張って」気になる子どもと家族を見だし、そのニーズに応じて即座に行動しており、小児看護師独自の働きが考察された。

審査の中では小児科外来の看護師と家族の相互作用についてさらに考察することで、子育てで困っている家族、子どもに対する関心の低い家族、養育力の不足している家族などへのかかわりの示唆が得られるので、研究を継続していくことがすすめられた。

以上の論点を踏まえ、博士学位論文審査専門委員会では、本論文を学位規程第3条第3項に定める博士(看護学)の学位論文としてふさわしい水準にあると認め、「合格」と判定した。